講座名（専門科目名）	精神医学	連絡教授氏名	貴島晴彦
学生への指導方針	学生の希望を重視し、下記のグループに入って頂き、指導教官が責任を持って指導します。		
学生に対する要望	基礎・臨床研究を徹底して学び、良き指導者となれるよう努力して頂きたいです。		
問　合　せ　先	(Tel) 06-6879-3051 (Email) wafukai@psy.med.osaka-u.ac.jp	担　当　者	髙橋 隼
その他出願にあたっての注意事項等			

精神医学教室は認知症や精神疾患の解明と治療法の開発を目指す多角的研究を行っております。以下の５つのサブグループから成り立っており、各グループ間で相互にデータベースの共有や活発な討論を行っています。

【神経心理研究室】では、「心の働き」と「脳のしくみ」の関係を明らかにする研究を行っています。 神経心理学は、人の認知・行動・感情・思考、そして自我意識や社会性など、心のさまざまな働きが脳とどのようにつながっているのかを調べる学問です。研究対象は、老年期妄想症などの精神科疾患だけでなく、脳神経外科や救命救急から紹介される高次脳機能障害まで幅広く扱っています。また、健常者を対象とした研究、ICT（information and communication technology）を活用した認知症研究、認知症患者さんの在宅支援に関する研究にも取り組んでいます。脳の状態を調べるために、頭部 MRI や脳血流 SPECT といった画像検査を用います。近年の画像解析技術の発展により、より細かな脳の特徴を捉えることが可能になっています。研究活動を通して、精神症状や認知機能障害を正確に評価するための臨床スキル、画像読影の技術、データ解析の方法などを身につけることができます。また、研究科内の他研究室と連携したプロジェクトにも参加でき、幅広い視点から学ぶことができます。

【神経化学研究室】では、神経変性疾患を中心に、自閉症スペクトラムや統合失調症などの精神神経疾患について、分子レベルで病態を解明する研究を行っています。遺伝学・生化学・バイオマーカー研究・脳機能解析など、幅広いアプローチを通して、基礎研究と臨床研究をつなぐ力を身につけることができます。多くの精神神経疾患では、いまだに根本的な治療法や明確な診断方法が確立されていません。患者さんやご家族のニーズに応えるためには、病態を分子レベルから深く理解し、疾患をより細かく層別化していくことが重要です。当研究室では、そのための研究を最先端の設備を用いて進めています。現在は、前頭側頭型認知症、遅発性統合失調症、自閉症の分子病態解明、アルツハイマー病の発症前診断マーカーの開発、Aβ 蓄積の制御機構の研究など、多様なプロジェクトが進行中です。これらの研究は国際的にも高く評価されています。研究活動にあたって医師免許の有無は問いません。これまでの大学院修了生の多くが、米国やドイツなど海外の研究機関へ留学・研究職として進んでいます。また、精神医学教室内の他研究室や国内外の研究機関と連携した共同研究も積極的に行っています。

【認知行動生理学研究室】では、脳波、脳磁図、磁気刺激、経頭蓋電気刺激など、神経生理学的な手法を用いて脳の働きを調べる研究を行っています。認知症性疾患やてんかんをはじめ、統合失調症、うつ病など主要な精神疾患を対象に、脳波・脳磁図のデータを定量的に解析し、病態の理解、鑑別診断、治療効果の予測や評価につなげる研究を進めています。また、磁気刺激を用いた治療や脳機能評価、経頭蓋電気刺激が認知機能に与える影響を調べる試験的な研究にも取り組んでいます。さらに、大阪大学高等共創研究院との共同研究として、脳波と AI を組み合わせた「認知症の超早期鑑別診断」にも挑戦しており、最先端の技術を活用した研究が進行中です。

【脳波睡眠研究室】では、睡眠時無呼吸症候群、ナルコレプシー、レム睡眠行動異常症などの睡眠関連疾患を中心に、身体医学・精神医学・社会学まで「睡眠」を軸に幅広い研究を行っています。睡眠の問題はそれ自体が治療の対象となるだけでなく、統合失調症、気分障害、認知症、神経発達症など、多くの精神疾患や身体疾

患の病態とも深く関わっています。当研究室では、このような幅広い領域に関連する睡眠の問題について、診療と研究の両面から取り組んでいます。診療面では、睡眠関連疾患を専門に扱う外来を担当し、必要に応じて睡眠ポリグラフ検査（PSG）を実施しています。睡眠医療を包括的に診療できる専門医は国内でも多くはなく、大学院在籍中には指導医とともに専門外来を担当しながら、PSG を含む臨床研究データの収集や睡眠学会専門医の取得を目指すことができます。研究面では、専門外来で得られた診療データを活用し、睡眠関連疾患の病態解明、診断技術の向上、治療アドヒアランス改善などの臨床研究を進めています。他の研究チームや講座、関連病院の睡眠医療センターと連携したプロジェクトも多く、幅広い視点から研究に取り組むことができます。また、睡眠不足や睡眠-覚醒リズムの乱れといった生活習慣の問題も重要な研究テーマです。大阪大学キャンパスライフ健康支援センターでの診療や健康診断データを活用し、「睡眠社会学」と呼ばれる領域の研究にも取り組んでいます。

【児童青年期（精神病理）研究室】では、精神疾患の病態・治療・支援について精神病理学的な視点から研究し、その成果を医療だけでなく、行政・福祉・教育・司法など社会全体に還元することを目指しています。臨床実践に深く根ざした研究が特徴です。研究対象は、神経発達症、解離性障害、トラウマ関連障害などの精神疾患に加え、児童青年期精神医学、周産期メンタルヘルス、LGBTQ、グリーフケア、AYA 世代のがん患者のメンタルヘルスなど多岐にわたります。神経発達症については、診断・支援・特有の症状の理解に重点を置き、臨床と研究の両面から取り組んでいます。神経発達症は、児童青年期だけでなく成人期の社会適応にも影響する重要な概念ですが、特有の症状や定型発達との連続性、他の精神疾患との鑑別の難しさなど、未解明な部分が多い領域です。当研究室では、精神病理学的な視点を大切にしながら、病態理解と支援のあり方を探究しています。研究手法としては、記述精神病理学やロールシャッハ・テスト（阪大法）などの心理検査を中心に、質問紙・心理検査・インタビューを用いた質的・量的研究を行っています。特に子どもに関しては、発達や育ちをエピジェネティックな視点から捉え、子どもや家族が抱える問題の理解、治療・介入の効果検証、精神科医や心理臨床家向けの教育プログラムの開発にも取り組んでいます。当研究室には、一例一例の症例を丁寧に探究する臨床マインドが根付いており、精神療法などの臨床実践から得られる事例研究を重視しています。他研究室との共同研究も積極的に行っています。さらに 2024 年度からは、自閉スペクトラム症や ADHD などの病態解明に向けて、臨床検体、大規模データ解析、モデル動物による機能解析を組み合わせたゲノム医学研究も開始しました。連合小児発達学研究科や国内外の多施設と連携し、国際的な研究活動も展開しています。学会発表や論文作成についても積極的に支援しています。